

鎌倉山行者道ハイキングコースは、加西市の北部、河内町に位置し、名刹普光寺を中心に、鎌倉山とその周辺山稜の旧行者道をまわるコースです。

鎌倉山は高く美しく、大きな磐座をもち、近郷一円の水源でもあるため、古くから神体山として賀茂郡（今の加西市・小野市・加東郡）の神々の古里と崇敬され、神話や伝説に登場します。

北条の「住吉神社」や、社町の「佐保神社」の神社記によれば、いずれも鎌倉山から降臨された神と記されています。

「修験道」の開祖は役行者とされます。修験道がもっとも民衆の生活に深く浸透していったのは江戸時代でした。医療の行き届かない農山村では、山伏の祈祷がそれに代わるものであったし、講を結んでの登山参行は、庶民にとっては大きな娯楽でもあったのです。近郷でも江戸時代から修験道が盛んになり、明治三十五年（1902年）、ときの普光寺・明星院住職の蓬萊実隆師のご尽力によって、霊峰鎌倉山に連なる峰々に行者道が開かれ、修験道播磨支局が設置され、播磨における修験道の中心となりました。

その後、行者道は荒れていましたが、平成十三年地元の多くの方々の努力によりハイキングコースとして整備されました。

ハイキングコースは、Lコース(マップ朱書)とSコース(マップ青書)の2ルートが設定されており、Lコースは、元の行者道の全行程をまわるコースで、全行6,300m、所要時間は3～4時間です。Sコースは短縮コースで、全行5,350m、所要時間2時間30分～3時間30分です。

Lコースは、東南麓の「是より行者道」の道標①から登ると、まず「愛宕神社の石鳥居」②があり、文化七年(1810年)四月吉日と刻まれています。これからの行者道中には、役行者(①④⑥⑧など)、不動明王⑤⑥、普賢菩薩⑥、弥勒菩薩⑦、釈迦如来⑧、大日如来⑨、孔雀明王⑩など多くの石仏像がまつられ、行者道の面影を残しています。

鳥居からやや進むと「護摩堂」③に達します。屋根の頂には「播磨支局護摩講」の棟札が見られ、毎年12月には、前の広場で護摩が焚かれていました。寛政八年(1796年)に創建され、現在のお堂は昭和三十一年(1956年)に再建されたものです。

やがて行く手の磐座には、火の神をまつる「愛宕神社」④の祠があり、毎年7月には松明が焚かれていました。石段の袖には文化八年(1811年)河内村中と刻まれています。

次の「鉢尾峰」は「大天井」⑪とも呼ばれ、丹波路が一望出来る戦略的要衝で中世の山城跡です。やや進むと加西市、西脇市、多可郡の「市郡境界点」⑫に達します。

次の「東ののぞき」⑬の磐座には役行者と不動明王がまつられ、修行に使用した鉄鎖が残っています。

次に多可郡八千代町柳に通じる「柳峠」⑭を横切り、2つの鉄塔⑮⑯と孔雀明王石仏⑰をへて、「鎌倉山頂」⑱に達すれば、法起菩薩像がまつられ、周辺の広場はその昔、護摩を焚いて雨乞いをした所です。天候が良ければ、南に広大な播磨平野が一望出来るばかりか、遠く明石大橋や瀬戸大橋も望めます。

東に下れば「西ののぞき」⑲に達し、目もくらむような崖壁に磨崖仏が刻まれています。また、この岩には、法道仙人が入定された岩洞があり、仙人が入定されて以来、かぐわしい香りを放ち絶えることがなかったことから、「抹香岩」と呼ばれています。

やや引き返して下れば、「宝来山鎌倉寺」⑳があります。寺伝によれば、神亀六年(729年)、中衛大将藤原房前公の御願により、徳道上人の開山とされます。当初のご本尊は、奈良の豊山長谷寺(西国霊場八番札所)のご本尊を彫った有名な仏師が、同じ楠の霊木をもって試し彫りした「十一面観世音菩薩像」で、「こころみの観音」と呼ばれました。現在の本堂は文化十三年(1816年)再建されたものです。

隣の磐座には、山の神をまつる「鎌倉神社」の祠があり、文政八年(1825年)に創建されたもので、社前の石灯籠には文政七年(1824年)十月と刻まれています。

鎌倉神社から山を下ると、明治三十九年(1906年)に建立された萬度供養塔㉑があり、その先の「是より鎌倉山」の道標㉒のあるところが終点となります。

Sコースは、普光寺山門㉓を抜け、ハイキング案内所㉔のある駐車場から登るコースです。すぐ奥の旧校舍裏から右に入り、杉林の中を登って行くと、Lコースとの合流点㉕に達します。後はLコースと同じです。また、㉖の柳峠から下山するコースや逆まわりにまわるコースなど、いろいろコースを選ぶことができます。

蓬萊山普光寺㉗は、白雉二年(651)法道仙人開基と伝える古刹で、朱の美しい山門やそれにつづく杉並木の太木、市指定文化財の宝篋印塔や日本一の大きさとも言われる石灯籠など見所も豊富で、境内に湧く名水を飲みながら、ハイキングの疲れをいやすのには最適の寺院です。